FLOW´S BEST

一線で活躍する元気なOB・OGたち。今春卒業する学生へ向けた熱きメッセージ。

神宿 智帆 さん

●かみやど・ちほ
02年3月大阪工大高卒。06年3月大阪工大工学部建築学科卒。前田建設工業関西支店勤務。大阪府出身。28歳。

大阪工大の学位記授与式で（前列右端が神宿さん）

多くの人と1つのものを作り上げる魅力 やっぱり現場は面白い

大阪工大高（現常翔学園高）、大阪工大で建築を学び、前田建設工業に入社した神宿智帆さん。男性社会といわれる建設工事現場で施工管理にあたり、「かみちゃん」と慕われながら多くの作業員を束ねています。女性が専門職に就き、大掛かりな案件を動かす面白さ、やりがいなどについて伺いました。

ヘルメットに作業着の出で立ちでてきぱき動き回る、きゃしゃな女性。神宿さんが前田建設工業で集合住宅や倉庫などの施工管理に携わるようになって、丸6年が経ちます。彼女の仕事は計画通りに工事が進むよう現場を管理すること。作業の工程表を作成し、各現場の作業や協力会社間の調整をしたり、必要な資材の納入状況をチェックしたり、スムーズに工事を進めるために全体の進ちょくや品質、安全などあらゆる面から管理しています。

「高校で建築科を選んだのは、何か人と違うことをやってみたかったから。将来は専門性の高い職業に就きたいと考えていました。先生の助言もあって大阪工大に進学し、新しい世界が開けました」。朝礼に始まり、作業内容の確認や打ち合わせを行い、携帯電話が鳴っては現場の作業員のもとに飛んでいきます。ひっきりなしに鳴る携帯電話で現場に指示を出す神宿さん。頭の中には完ぺきに図面が入っているのではないかと思うほどに、その指示は的確で細かい。夕方に作業員の作業が終わっても、彼女の仕事はその日終了した作業の確認や翌日以降の準備など、深夜まで続きます。日によっては終電で帰宅することも。めまぐるしい忙しさですが「朝起きた時はしんどいと思っても、現場に行けば元気な職人さんたちが待っていてくれる。そのエネルギーをもらって、今日も頑張ろうと思えるんです」

躯体、内装それぞれに協力会社の作業員たちは皆、その道のプロばかり。だからこそ厳しい指摘も受けるし、学ぶことも多い。入社して間もないころは「何かしなければ」と気持ちが焦り、「余計なことをするな」と怒鳴られたこともありました。「できないことが悔しくて、怒られたことが悔しくて、新人のころは家に帰ってよく泣きました」。それでも支えてくれたのも励ましてくれたのもやはり現場の仲間たちでした。「女性の施工管理職はまだ多くありませんでしたので、長続きしないだろうと思われていたかもしれません。でも私の顔や名前を覚えていてくれて、別の現場で再会した時に『なんや、まだ辞めてなかったんか』とニコニコしながら声を掛けてくださる方も。1つの建物を一緒に作りながら信頼関係も築いているのだと感じます」。また昔から点数で評価されるのが性に合わないという神宿さんにとって、「今回の段取りは良かったな」「これはもう一歩やな」という現場の声は何よりも率直な評価で、反省にも励みにもなります。

100人以上の作業員を束ねる責任は重大で、信頼関係を築くことの大切さを実感しています。自分より一回り以上も年上の人たちを相手に、期日通り竣工となるよう交渉・調整しなくてはいけません。そうしたコミュニケーションの大切さや、いろんな人とかかわることの面白さを教えてくれたのは、大阪工大での4年間でした。海外語学研修に参加したり、ラグビー部のマネジャーを務めたり、資格取得に励んだり、充実した大学生活を共に過ごした仲間たちとは、今でも年に数回女子会をしています。「ゼネコンで施工管理職に就いている友達が何人もいて、仕事が大変だ、体がきつい、と同じ悩みを言い合いながら、それでもこの仕事の面白さや魅力も分かち合える。誰も仕事を辞めないから、私も負けられません」。将来のパートナーとなる男性とも研究室のOB会で知り合い、今春結婚する予定です。「生活は変わるけれど、できる限り仕事も続けていきたいですね。私、採用試験の履歴書に『仕事と家庭を両立させてこそ、自分らしさです』と書いたんです」。仕事にプライベートに奔走する「かみちゃん」の日々は続きます。